7-9 水辺の植物

「海浜植物」と「原野の植物」の2つが特筆され、琵琶湖独特の自然を構成しています。海浜植物については、開発と保全の共存が課題です。一方、低湿地には原野の植物がみられ、西の湖はその宝庫です。

1. 海浜植物

驚いたことに、海辺の砂浜に生育するはずの海浜植物が琵琶湖にも生育しています。代表的なものに、タチスズシロソウ、ハマダイコン（以上アブラナ科）、ハマエンドウ（マメ科）、ハマヒルガオ（ヒルガオ科）、ハマゴウ（シソ科）があります。これほど多くの海浜植物が日本の内陸に生育する例は他になく、琵琶湖の大きな特徴です。なかでも、全国的に絶滅が心配されているタチスズシロソウの豊富なことが注目されます。タチスズシロソウは、兵庫県や大阪府で絶滅し、高知県や三重県では絶滅寸前です。琵琶湖でも減少傾向ですが、東岸の菖蒲浜や日野川河口のように砂浜の人為的な攪乱によって大規模な群落が復活した例があります。一方、ハマエンドウとハマゴウはもともと琵琶湖での分布が限られていたために、消滅寸前です。琵琶湖の特徴ある自然を未来に継承するために、ビーチ開発と保全との共存が求められています。

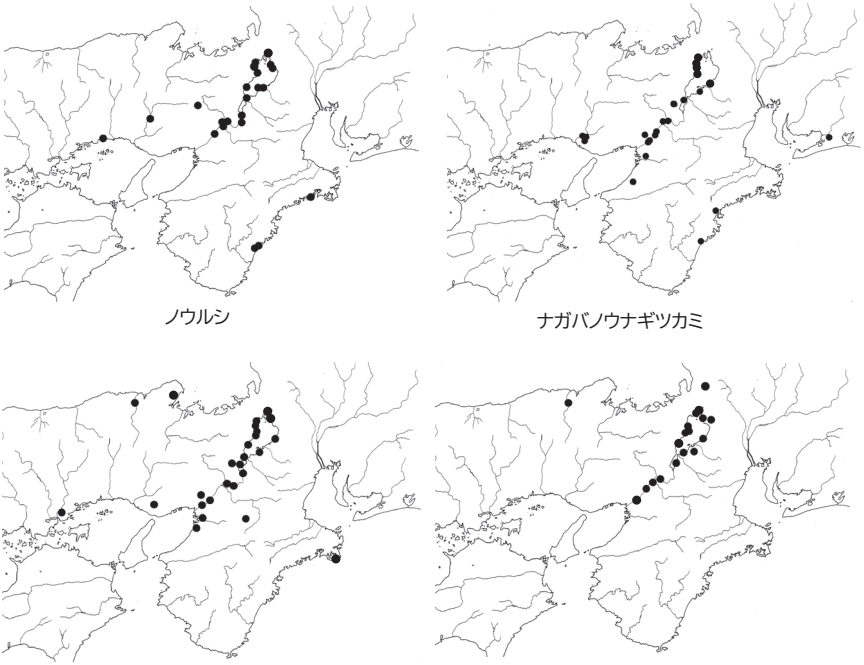
2. 原野の植物

琵琶湖・淀川水系に集中して分布する低湿地性の希少植物を「原野の植物」と呼びます。代表的な例に、ナガバノウナギツカミ、サデクサ（以上タデ科）、タコノアシ（タコノアシ科）、ノウルシ（トウダイグサ科）、ドクゼリ（セリ科）、コバノカモメヅル（キョウチクトウ科）、オオマルバノホロシ（ナス科）、オニナルコスゲ（カヤツリグサ科）などがあります。原野の植物は、低湿地のどこでも生育するというわけではなく、琵琶湖・淀川水系、加古川水系、円山川水系、由良川水系などの大河川に特徴的です。しかし、紀ノ川や熊野川のように低湿地環境に乏しい急流河川には見られません。これらのことから、原野の植物の生育には大規模な氾濫原環境が必要だと想像されます。また、琵琶湖からは氷期の遺存と考えられるヤナギトラノオ（サクラソウ科）とツルスゲ（カヤツリグサ科）も見つかっています。両種とも寒冷地の湿原や湿地に生育する植物で、琵琶湖が国内分布の西南限となっています。

原野の植物は琵琶湖本湖に隣接する内湖にも生育しています。内湖の一つである西の湖には、ここで挙げた種類がすべて生育しており、琵琶湖の低湿地性希少植物の宝庫となっています。

タチスズシロソウ　　ハマゴウ

図7-9-1　海浜植物2種の近畿地方における分布(藤井(1994))



ノウルシ　　ナガバノウナギツカミ

ドクゼリ　　オオマルバノホロシ

図7-9-2　原野の植物4種の分布(藤井(1994)＆藤井(2006)に加筆)

人間環境大学　**藤井 伸二**